

領域 4 インフォーマルミーティング議事メモ

2012年9月20日(金) 17:00~18:30 FB 会場

代表：白石賢二(筑波大)

副代表：澤田安樹(京大低温センター)

運営委員：

(2012年4月-2013年3月) 渡辺信嗣(金沢大)、長谷川尊之(兵庫県立大)、橋坂昌幸(東工大)

(2012年10月-2013年9月) 鈴浦秀勝(北大)、横山毅人(東工大)、青木伸之(千葉大)

■【報告事項】

- ✓ プログラム小委員会(2012年5月23日、議長：三沢和彦)における採択結果について。
 - ・ 招待講演：14件 採択(条件付含む)、1件取り下げ
 - ・ 企画講演：2件 採択、0件不採択
 - ・ チュートリアル講演：3件採択、0件不採択
 - ・ シンポジウム：14件 採択(条件付含む)、0件 不採択

- ✓ 領域委員会(2012年5月23日、議長：三沢和彦)における物性領域の略称について。

各領域に依頼していた物性分野領域の略称表示について、議長から説明後、意見交換、討論が行われた。内容は以下のとおり。

(議長より)

 - ・ 今回の趣旨。理事会の意向。
 - 領域ごとに番号がついているが、実際には各分科が残ったままになっている。
 - 領域の外から見た場合、内容がわからないので、わかりやすくした方がよいのではないか。
 - ・ 略称名「5文字」にはこだわらない。文字数制限を緩和した場合はどうか。

(領域運営側からの意見)

 - ・ 「分科」がなくなってしまうのではないかと不安。
 - 「分科」がなくなってしまうのは困る。
 - ・ 文字数で反対しているわけではない。
 - 物理学会として、今後、領域をどう扱うのか、スタンスが見えない。
 - 全体的な議論がない。将来どうするのか。
 - ・ 領域制になって、これまで分科を消す努力をしてきた。その結果が出てきている今、やめないで欲しい。
 - ・ 領域制に変えた時に、違う分科が一緒になって出来た領域は、個性のない数字表記の方がよい。前の分科の略称に戻すデメリットもある。
 - ・ 各分科の伝統が残っているので、現在の領域のまま略称をつけるのは難しい。
 - ・ 領域制の評価がされていない。
 - ・ 番号が嫌なわけではない。

- ・ 英語にした際の、「division XX」では、内容がわからない。keyword をつけて欲しい。
- ・ 略称表示について、提案の趣旨がよく伝わっていないと見受けられる。

----今後の方針、会議の総括---

名前を変更する前に、領域番号制の総括、今後領域をどのようにするか、将来的な問題を含め、WG をつくり組織全体としての検討の必要があるとされた。

===審議事項===

■ 1 次期領域代表、副代表の紹介

- ✓ 次期領域代表として澤田安樹を確認。
- ✓ 次期領域副代表として加藤岳生が紹介された（拍手をもって承認）。

■ 2 新運営委員の紹介、次次期の領域運営委員の承認

- ✓ 旧領域運営委員の任期終了の確認。
(2011年10月-2012年9月)：加藤岳生、瀬川耕司、森山悟士
- ✓ 次期領域運営委員の任期開始の確認。
(2012年10月-2013年9月)：鈴木秀勝、横山毅人、青木伸之
- ✓ 次次期領域運営委員の承認。
(2013年4月-2014年3月)：寺澤大樹(兵庫医大)、望月敏光(東大物性研)、植田暁子(筑波大)らを次次期の領域運営委員として物理学会に推薦することが、領域4運営委員の全員一致で拍手をもって承認された。

■ 3 プログラム編集作業について

□ 3.1 プログラム編集会議での作業の確認と反省

- ✓ 「事前ソート」に関して。
前回のプログラム編集会議に参加した、加藤、森山、橋坂から「事前ソート」が功を奏し、プログラム編集会場での作業が非常に円滑に行えた、という報告がなされた。次回のプログラム編集会議ではノウハウを知っている橋坂が中心となってこの作業を指揮することが確認された。

□3.2 領域7との合同セッション

- ✓ 領域7と領域4でグラフエン合同セッションを引続き行う方針を確認。
プログラム編集のテクニックは加藤から鈴浦へと引き継ぐことを確認した。

□3.3 キーワードについて

- ✓ 次回から第3キーワードの選択が必須になることを確認。
- ✓ キーワード変更の提案は今回はしないことを確認。
引続きキーワード選択の変遷のデータを蓄積しながら、変更の必要性をMLで継続議論する。注視すべきキーワードとして今回選択数が0である第3キーワード「アモルファス・微粒子・クラスター」、「ナノチューブ」、「MEMS」について議論し、これらのキーワードは当面残すことを確認した。

■4 シンポジウム提案

- ✓ 領域4運営委員会から以下の2つのシンポジウム企画の提案がなされた。
 - ・「フォノンの理解・制御によるエレクトロニクスの新展開（仮題）」
 - ・「～核スピンエンジニアリングへの挑戦～ ナノ領域における核スピンの検出・制御とその応用に関する話題～（仮題）」なお、これらの企画を両立できなかった場合の優先順位は「フォノン」>「核スピン」とすることを確認した。

□特記事項

- ✓ シンポジウムの講演者に関する指摘
2つのシンポジウムのプログラム原案とも理論家の講演者が少ないという指摘があった。実験の講演者が多い理由として、理論と実験のバランスよりもシンポジウムの「ねらい・趣旨」を優先して人選を行った旨をシンポジウム企画者が回答した。なお、この事はシンポジウム企画の規定にも抵触しないことが確認された。
- ✓ シンポジウム企画書の作成について
今回のシンポジウム提案書（「揺らぎ」「トポロジカル」）は重複規定などの懸念事項が全て「特記事項（注意事項）」としてチェックされており、非常に出来が良かったという指摘があった。このようなシンポジウム提案書におけるテクニックは今後にも是非引き継がれる（できればマニュアル化する）べきであるとの提案がなされた。今回提案された2つのシンポジウム「フォノン」「核スピン」の企画者は、「揺らぎ」「トポロジカル」の提案書を参考にすることを確認した。

■ 5 領域略称名について

- ✓ 領域委員会でなされた領域略称名に関する提案について議論した。
領域名や領域略称名の提案がなされた背景には、物理学会の国際化という流れがあるように思われる、という意見が提出された。この意見に対して、領域 4 運営委員会は重要と思われるアメリカ物理学会のキーワードを注視しながら、次回の領域代表会議（2012 年 11 月）に向けて運営委員 ML で更に議論を深めることを確認した。

■ 6 若手奨励賞について

- ✓ 若手奨励賞の応募状況について
最近、若手奨励賞への応募件数が少なくなっていることが指摘されたので、どうすれば応募件数が改善できるのか議論を行い、以下の事を確認した。HP、ML を通じてこれまでどおり若手奨励賞について広報を行うが、これらの方法には限界があるので口コミによる日頃からの広報活動が重要である。少なくとも領域運営委員は日頃からの積極的な広報活動を心がけるようにすること。

□特記事項

- ✓ 若手奨励賞について、以下の疑問が挙げられ、**次回の領域代表委員会において問題提起することを確認した。**
日本物理学会若手奨励賞実施要綱(9)
(http://www.jps.or.jp/activities/awards/wakate_youkou.html)によれば、「申請時に複数領域に応募することは妨げない。また、複数領域で候補者となった場合は候補者が一つの領域を選択するものとする。」とあるが、実際には選択できなかった（候補者ではなく領域運営側が選択した）という事例が報告された。また、受賞候補辞退者が出ることを懸念して領域運営側がこのような対応をとったのであれば、複数領域に応募する場合、応募者は応募書類に第一希望から順に記載するようにすれば良いのではないか、という解決策も提案された。

■ 7 領域 4 の HP 管理について

- ✓ HP 管理者は引続き 2 人体制を維持することを確認した。
今回引退する加藤に代わり、鈴木が新しく HP 管理者になることを確認した。
- ✓ 運営委員 ML の管理者の引き継ぎ
加藤から渡辺へ管理者を引き継ぐことを確認した。